



The end of monetary economy
Minamiamabe Kakugo

目次

プロローグ	1
(1)	3
(2)	5
(3)	7
(4)	9
(5)	11
(6)	13
エピローグ	15

プロローグ

広島市、とある住宅街の昼下がり。

梅雨前半の気怠い空気が、早くも陽炎を沸き立たせる長い坂道を、数人の男が駆け降りてくる。

坂の終端には、築年数を重ねいっそう黒々と不気味な岩塊のような古い屋敷が、木立の陰に沈んでいた。

男達に続いて赤色回転灯の車列が、周囲の静寂を覚醒させる。

最後尾のワゴン車に、「SRI」のイニシャルが辛うじて読み取れる。

やがて、屋敷の複数の窓からオレンジ色の明かりが明滅し始めた。

「ギイヤア〜！」

県警庁舎の全フロアを貫く大音響だった。

「〜先輩、また勝手に引き落とされた！」

青い顔をして玲子の一課長ブースに飛び込む。

「どうした笑ちゃん？ またカード？」

「今度は、スマホのコード決済のようです！ パスワードと暗証番号、この前変更したばかりなのに・・・。」

「生体認証掛けてなかったの？」

「親指の指紋登録してました。」

「指紋もコンピューターに入れば数字の羅列だからね、いくら盗まれたの？」

「3万円・・・この前の2万円と合わせて合計5万、一体どんな野郎が掠め取ったのか！ 見つけたら処っ引いて、けつの穴に一升瓶ぶちこんでやる！」

「汚い表現ねえ。でももう銀行口座で資産を維持するのは、土台無理なのかも知れないわね。」

「どう言うことですか？」

「あなたも経験あるでしょ、うっかりカードで残高以上の買い物しても、商品が届いたこと。それは、ネット上の他人の口座で決済してるってことよね。気が付いて黙っていれば犯罪だけど、本人が気が付かないこともある。ネット上の端末の中には、相当数の量子コンピュータも存在するっていうから、パスワードも生体認証も瞬時に突破される。今や銀行口座はネット上の公開口座（フリーアクセスマネープール）のようなものよね。」

「銀行口座でお金管理できなきゃどうするんですか？ 現金でタンス預金ですか？」

「現金（お札）も信用できないわ、判別できない贋札がいくらでも出回ってるし・・・。」

「金と宝石、不動産なら・・・。」

「元素合成で金もプラチナも製造できる、ダイヤやルビーは工場で大量生産される時代よ。」

「不動産は？」

「不動産の権利を管理するのもネット上の数字、どうにでも編集できるわ。」

「元々はネット上の偽サイトや、フィッシング詐欺から始まった犯罪なんだけど、犯罪のリスクが分散されて、何も知らない個人の決済行為に少しずつ含有されるようになってる。警察もそれを一々抽出して立件は、到底出来ないわ。」

「そういえば、この前検挙した詐欺師、騙した金を自分の口座に入金してそのままにしてたら、知らぬ間に半分引き落とされたって言ってました。どうしてみんな気が付かないんですかねえ？」

「それは多分、儲けて貯めることしか感心のない人間と、お金を使うことしか興味のない人間が相当数いるからじゃない。」

「そうですね、株で大儲けした投資家は次の投資にしか金を使わないって言いますし・・・。」

「詐欺師も同様よ、騙し取った金は自分達の詐欺業務を継続させる為以外には使わないわ。」

デスクに置かれた紅茶カップの紅い液面に、細かな波紋が拡がり、近くのスマホが鳴動して着信を知らせた。

「臨場要請よ笑ちゃん、殺しだって！」

(1)

——3日前、大学病院の診察室。

穴見愁子は、金儲けや自身の出世と同様、男には興味がない。

だから、その日訪ねてきた若いイケメンにも、スタッフから渡されたカルテに目を通すのももどかしく、一瞬相手と視線を合わせただけで、直ぐに椅子を回して後ろを向いてしまった。

「株のトレーダーでもやっての？」

背を向けたまま、話しかける。

「そ、そうですが・・・カルテにそう書いてるんですか？」

「書いちゃいないけど、大きなタブレットの画面操作しながら、部屋に入ってくれば、大体見当は付くわよ。誰からの紹介？」

長い電子タバコの煙をくゆらせながら、穴見が尋ねる。

「紹介状は有りません、病院の受付で病状を話して、最初内科の先生が診てくれたんです。耳鳴りが酷いというと耳鼻科で、次に脳神経外科に回されました、そこから整形外科、口腔外科と続いて・・・。」

「最後、婦人科の私のところ？」

「先生は、司法解剖も担当されてこの病院のラスボスだって聞きましたが・・・。」

向き直ってイケメンの顔を見る。

「ラスボスかどうかは分からないけど、男を診るの余り得意じゃないの、婦人科だからね。それよりあなたタブレット弄るの、いい加減にしない？」

慌ててイケメンが操作していたタブレットを小脇に仕舞う。

「株なんてやったこともないけど、トレーディングってどんな仕事？」

「自宅でデイ・トレーダーやっています。短期の売買で日々の糧を得て・・・。」

「儲かるの？」

「多少経験を積めば、相応の数学の知識と勘とで何とか生活はできますが、今は口座の維持が大変で・・・。」

「口座って、証券口座？」

「そう、株取引の世界も多分に漏れず詐欺が横行していて・・・。」

「でも、収益は専ら自分の口座に入金されるんでしょ？」

「知らない間に、勝手に意図しない銘柄を買ってたりするんです。個人情報が出てるんでしょうね、でもどうやって証券口座にアクセスしてるのかは分かりません。口座は、証券会社の厳重なセキュリティで保護されている筈なんですが・・・。」

「それで、耳鳴りはいつから？」

「3週間ほど前からです。自宅で銘柄のチャート分析を始めると、黒板を引っ掻くような高い音が聞こえてきて、我慢してモニター見続けると益々酷くなって・・・。」

「仕事が出来ないわけね。」

「そのうち、音が段々低くなって・・・坊さんの読経のように、なんだか証券コードを何度も繰り返してるようで・・・。」

「証券コードって株の銘柄？」

「そうです。そしてその銘柄の分析を始めると、症状が和らぐんです。和らぐというか、頭がスッキリしてやる気が出てきます。その銘柄を売り買いした後は、ワクワクと楽しい気分になります。」

電子タバコのカートリッジを交換していた穴見の指が一瞬止まった。

「ちょっと、眼を見せて・・・。」

デスクライトを当てながら、イケメンの眼を覗き込む。

「あなた、ドラッグやってない？」

そのまま若者の袖をまくって上腕部を露出させる、10 cm程の縫合跡が現れた。

「これは？」

「半年前にバイクで転倒して創った傷跡です。気を失ったんですが、直ぐ近くの病院に運ばれて、命拾いしました。出血が酷くて緊急輸血を受けたそうです。」

「・・・輸血を。」

そう言うと、スマホを取り出して誰かに連絡する。

「あなた、直ぐに頭部のMRI検査受けなさい。検査科に指示を出しておくわ。」

そのまま、パソコンのキーボードを叩き始めた。

(2)

「半年ほど前から内偵入ってましてね。この病院突き止めて、先週から張り込んでたんですよ。」

「今日の昼過ぎに受け渡しがあるって垂れ込みで、SRIにも動員かけて踏み込んだんです。」

「いえ、合成麻薬です。ある筋からの情報で……。」

捜査第五課長は、恐縮げに説明した。

「一課長さんまで御足労かけて……とんだことになりました。」

「それで、ご遺体は？」

玲子が古びた待合室の受付カウンタから中を覗き込みながら、五課長に尋ねた。

「地下室です。既に搬出した後ですが、男2名女2名で現在身元特定中です。」

「——鑑識は、なんて言ってます？」

「死後一時間ほど、何らかの薬害死だろうと……。」

「薬害死？ 毒物ですか……突入を察して服毒したのかしら？」

奥の階段を降りると、重たい空気に満たされた地下倉庫だった。

複数のスチール棚に、所狭しと医療器具が並ぶ。

一角に小さなテーブルがあって、その下の暗い床に4体の人型が白く粹取りされていた。

「年恰好からすると男二人は医師で、女性は何れも看護師でしょう。長い間地域の医療を担ってきたクリニックなんですけど、5年前に前の院長が亡くなって、暫く休診していたようですが、2年前から別の経営者が後を引き継いで、診療を再開したようです。」

「——前の院長の親戚かなんかですか？」

鑑識スタッフの邪魔にならぬよう気を遣いながら、笑子が尋ねる。

「それが……海外資本の医療法人のようで、スタッフの出入りが激しくて。耳鳴りで通ってる或る患者によると、毎回診てくれる医師が、違ったようです。」

「ただ評判は良かったようで、待合室はいつも一杯で予約を取っても待たされたそうです。」

「そんな中、秘密裏に中毒患者に合成麻薬を売っていた……。」

「売っていたんじゃないかと、配っていたようです……。」

「——配っていた！」

笑子が金切り声を上げる、鑑識スタッフが驚いて振り返る。

「外科クリニックですからね、合成麻薬は幾らでも手に入る。出入りしていた中毒患者を問い詰めると、金を払ったことは一度もないって言ってます。点滴一本受けると、小さなカプセルに入ったのを一つ貰えるそうで……。」

地上に続く小さなドライエリアの外が、西に傾きはじめた陽光を浴びて紅く輝いている。

「——五課長、確か電話では“殺し”だって断定してましたわね？」

五課長が袂のゴミ箱を抱え上げて、中身を見せた。

「今日も、患者が多くて・・・多分4人とも大急ぎのランチだったんでしょう。最後の晚餐がこれってこともないだろうから、“殺し”でしょうね。」

ゴミ箱の中の紙袋には、マクドナルドの包み紙と紙コップが4人分捨てられていた。

(3)

広島県警本部、捜査一課ミーティングルーム。

朝早くから女刑事カップルの他、SRI 奥寺、穴見女医、珍しくジョン・クアリも立ち会っている。

「奥寺君、昨日はいなかったわね。現場第一主義の貴方にしちゃ珍しいじゃない、何かあったの・・・？」

席に着いた玲子が、パソコンの準備を終えた奥寺に尋ねる。

「警察庁で最近のオンライン詐欺の講習です。ZIP ファイルでの送金が一般化したことで、かつての成りすまし詐欺やロマンス詐欺は沈静化したんですが、今は株式や証券市場に暗躍する詐欺が流行っているようで・・・。」

「そうか！ 株式の売買に ZIP ファイルは使えないものね。」

最近、ポートフォリオの勉強を始めた笑子が話を繋ぐ。

「——あら、あなた昨日コード決済で詐欺に逢ったって言ってたじゃない、奥寺君に犯人ピックアップして貰えば？」

「あれ・・・私の勘違いでした。去年入会したトレーニングジムのサブスク・・・今月から引き落とし始まるの、すっかり忘れていました。」

爽やかな笑いが、朝の会議室の空気を穏やかに包んだ。

「じゃ、まず貴方からね。どうして SRI が呼ばれたの？」

玲子が口火を切る。

「差し押さえた合成麻薬が違法か合法か、現場で迅速に同定する必要があるので、臨場を要請されました。結論から言うと受け渡しの現行を押さえることは出来ませんでしたが、地下の薬品ストッカーに施錠された状態で、数種類のオピオイド系鎮痛剤のバイアルが保存されていました。モルヒネ、レミフェンタニル、オキシコドン、メペリジン、ペンタゾシン等々です、管理簿もしっかりして違法性はありません。」

「——レミフェンタニル！ クリニックで全身麻酔オペやってたの？」

女医が驚いた表情で口を挟む。

「専門医が 2 名常勤していたので、緊急の手術にも対応出来たようです。」

「穴見先生の方はどうでした、4 人の死因は？」

玲子が女医を促す。

「複数の毒性有機物の相互作用だと思う。横隔膜弛緩による呼吸不全、心臓を含む様々な臓器筋肉の弛緩、腎臓の血栓、血液凝固、それによる体内出血と多臓器不全。まるで、コブラとハブに同時に噛まれたような所見だったわ。」

「主因毒素の特定は？」

「——特定には相当時間が掛かると思うわ。それより不思議なのが、摂取方法が分からないことなの。体外から摂取したなら必ず経路に痕跡が残る筈、口腔、食道、気管にこ

れといった炎症や糜爛もない、全身の皮膚に穿刺痕や紅斑も認められなかった、眼と唇、肛門と陰部のような露出粘膜も異常なし・・・。」

「———ということは？」玲子が更に女医を促す。

「4人は、自分の体内で生成された毒性有機物で亡くなったことになる、自殺や他殺なんかじゃないわ。」

(4)

「私からもうひとついいですか・・・？」

穴見の話に聞き入ったその場の緊張が、奥寺の声で一瞬和んだ。

「押収したオピオイド系鎮痛剤とは別に、正体不明の白い粉末が薬品ストッカーにありました。現在分析中ですが、水にもアルコールにも溶けないので、違法薬物なんかじゃなくて、何らかの無機物（鉱物）だと思います。」

「——じゃ今回、薬物に関しては事件性なかったってこと？」

女医の言葉が空しかった。

ミーティングルームの窓から暗鬱とした空が見える、梅雨前期の鬱陶しさが垂れ込めていた。

「クリニックは中毒患者から、点滴を条件に、合成麻薬の代金を取らなかったんです。点滴が目的だったとして・・・患者の体内に何を入れます？」

女医の顔を見ながら玲子が尋ねる。

「点滴が必要になるのは、経口摂取が難しい薬品・・・やっぱり鎮痛系の薬物・・・。」

「——じゃなくて、患者には内緒で。」

「何らかの、薬品試験？ 生体実験！」

その時、奥寺のスマホに着信があった。

「SRI ラボからです、白い粉末の分析が終わったかな？」

「——こ、これは！」

スマホの画面を見つめる奥寺の顔が蒼くなった。

「六角虫ね！」

横から画面を覗き込んだ玲子が叫ぶ。

「——システム C です、間違いありません！」

凍りつく部屋の空気の背後から、微かな羽音を感じてジョン・クアリが身構えた。

天井の隅に小さな点が飛び回っている、アフリカ人の大きな両眼がそれを凝視する。

「——中毒患者の体内に点滴で入れたのは、六角虫だったのね！」

玲子の言葉に全員が頷いた。

「そういえば、4日前のことだけど・・・。」

女医が自分のスマホを出しながら呟く。

「耳鳴りがするって若い男の患者を診たの、念のため MRI で撮った映像がこれ・・・。」

頭部を輪切りにした映像だった、奥寺が操作してミーティングルームの大きなスクリーンに映し出す。

「注目してほしいのは内耳の部分、映像が真っ黒に潰れているでしょ、その周りは像が歪んでる、いろんなパラメーターで映像を調整してみたけど変化なし、MRI は主に体内の

水分（水素原子）の存在密度をコントラストとして映像化するんだけど、黒抜けは何らかの金属がその部分に密集しているってことなの・・・六角虫だったのね。そういえばその患者バイクで事故を起こして、近くのクリニックで輸血を受けたって言ってたわ。」
笑子のスマホに着信がある。

「捜査五課が、問題の医療法人が運営する全国のクリニックから、一斉に事情聴取を始めたようです。網にかかった中毒患者は片端から検挙しているって・・・。」

「——随分強引ね。」

玲子の眩きを覆い隠すようにジョン・クアリが立ち上がる、長い足をテーブルの縁にかけて空中に飛び出し、大きく振りかぶって何かを叩き落とした。

「さっきから・・・飛び回ってた！」

奥寺が床に落ちた小さな銀色の物体を摘み上げる。

「——六角虫、システム B です！」

(5)

「ぎゃあああっ〜!!」

顔を上げて外を見た笑子が悲鳴を上げる。

窓ガラス一面、銀色の小さな虫が張り付いて蠢いていた。

羽音がガラスを伝って室内に漏れてくる、そのうちの数匹が窓の外で破裂した。

ガラスが割れ落ちる、六角虫が一斉に室内に侵入する。

「みんな、伏せろお〜!!」

奥寺の大声に全員床に突っ伏す。

壁や天井に張り付いた六角虫が、次々破裂して大音響を上げる。

天井パネルの破片が頭の上に落ちてくる。

県警本部は大混乱に陥った。

逃げ惑う警官、我を忘れて泣き叫ぶ職員たち、外へ出ようと一斉に階下へ駆け下りる。

エントランスの自動ドアを出た途端、棍棒を持った謎の群衆に襲われる、慌ててエントランスへ逃げ戻る、追いかけて来た群衆、広い一階受付ロビーを戦場に、大乱闘となった。

翌日、中央区の県警本部は隣接する中央警察署も含め、当面稼働不可となった。

緊急対応として、東警察署にその主要機能が移されていた。

女刑事カップルも、東署の隅で不自由な対応を余儀なくされている。

「重軽傷者 32 名、公務執行妨害による逮捕者 48 名、暴徒群衆の総勢は推定 150 名だそうですよ。県警本部、ビル本体の構造には問題はないらしいですが、外部の窓ガラスや内部設備がぐしゃぐしゃで・・・。」

緊急に支給されたパソコンを操作しながら、笑子がぼやく。

「——死者が出なかっただけでも幸いよ、サーバーが破壊されたみたいだけど、バックアップは？」

「SRI のサーバーでバックアップ取れてますから、直ぐに復元出来るようです。」

思い掛けない笑子の答えに、パソコン画面ごしの玲子が振り返る。

「——SRI のサーバー？」

怪訝顔のすぐ隣でジョン・クアリが身構えている、手には警棒、頭はヘルメット。

「——もう心配しないでいいわよジョン、ここは東署だから。」

「あいつら警察に恨みある・・・きっとまた襲って来る。わたし、機械の虫大嫌い！」

その時、玲子のスマホに着信があった。

「奥寺君からよ、直ぐにラボに来て欲しいって！」

SRI のラボに着くと、穴見女医が談話スペースで奥寺と話を交わしていた。

「——二人とも怪我はなかったですか、奥寺君何か分った？」

打ち合わせテーブルの椅子を玲子に勧めながら奥寺が答える。

「窓の外から襲ってきた六角虫は、大きさから判断してシステム A ですね。但し新種で六本の触手の代わりに、小さなプロペラが付いています。体内には硝酸アンモニウムの詰まったカプセル、爆発力は小さいですがビルの窓ガラスを破るのには充分です。」

「白い粉末の、システム C の方は？」

「システム C も新種で、アミノ酸を組み合わせてタンパク質のような高分子有機物を生成する能力はいつも通りなんですけど、加えて電波を音波に、音波を電波に変換する機能が付加されています。今も穴見先生と話していたんですが・・・。」

女医が話を引き取る。

(6)

「昨日、頭部 MRI を撮った若い患者の話をしたわね。彼は耳鳴りが株式市場の証券コードを読み上げる、人の声に聞こえるんだって……。」

女医は5日前に診察したデイ・トレーダーの話を再度詳しく説明した。

「——読み上げられた銘柄を売買すると、楽しい気分になるって言ってたわ。」

「それと、報告だけどクリニックの4人にも、内耳周辺にやっぱり金属の反応があった、六角虫が生成した毒性有機物が死因で間違いないわ。」

更に続けて。

「あの後、公務執行妨害の逮捕者数人を診ただけど、外傷が酷くても全員興奮状態で痛みは全く感じてないみたい、脳内で生成されたアドレナリンとドーパミンの効果かもね。」

今度は、奥寺が話を引き取る。

「そこで、内耳周辺で六角虫が発する音波と、脳内で六角虫が生成する有機物（ホルモン）の効果を併用して、人の行動を制御出来ないかって、話していたんですよ。」

「内耳は人体の深い部位じゃないから、弱い電波でも拾える筈です。襲う対象を音に変換して何度も聞かせる、同時にアドレナリンやドーパミンを生成して興奮させ、正常な判断が出来なくさせる……。」

「——県警本部を襲え！ 県警本部を襲え！ ってやる訳？」

笑子が呆れ顔で茶化す。

「拘留中暴徒の、頭部 MRI が撮れると良いんだけど……。」

女医が呟く。

「ところで先生、耳鳴りの若者はその後どうなったんですか？」

「——それが、MRI 撮り終わった時点で耳鳴りが解消したって、そのまま帰って行ったわ。」

「奥寺君にも質問があるんだけど……県警本部のサーバーバックアップ、SRI で取ってるって聞いたんだけど、どういう事？ 本来なら警察庁のアーカイブセンターでバックアップすべきでしょ？」

玲子が少し険しい顔で訊ねる。

「行政官庁組織の弊害です、各県警は本庁のアーカイブセンターをそこまで信用していない。確かに他県の捜査資料を請求しても、直ぐに降りてこないし、本庁の都合で不完全なものが多いんです。勢い、自分達でバックアップを取りたくなる。SRI のサーバーは容量も大きいし、どの県警でもやってることです。」

「但し、今回の講習でバックアップをアーカイブセンターにもアップロードするよう徹底されました。本庁も県警を信用してないんですね。」

ジョン・クアリが警戒した眼差しで窓の外を見ている。

梅雨の奔りの湿った空気と、気怠い鬱陶しさが窓ガラスを通して染み込んでくるようだ。

「ところで、六角虫や群衆が県警本部を襲った目的は何だったんでしょうねえ？ 五課が中毒患者一斉に検挙始めたからでしょうか？」

笑子が窓際のジョン・クアリを見つめながらポツリと呟く。

「——強引な検挙を止めさせる為の脅しじゃないの？」

女医の安易な答えが返ってくる。

「それだけでしょうか？ 五課の違法薬物に関するこれまでの捜査資料は……。」

玲子の言葉を追いかけるように奥寺が反応した。

「全て、県警本部のサーバーに保存されています、確か30年以上の薬物中毒者のデータがアーカイブされていると聞いてます……。」

「そのサーバーは襲撃によって完全に破壊された！ そうか、薬物中毒者のデータ抹消が目的だったのか！」

「——そして今、バックアップがあるのは！」

と女医が大声を上げる。

「——先生、MRI撮った後耳鳴りが解消したって言ってましたよね！」

奥寺の叫びと同時に、ジョン・クアリが窓際で騒ぎ始めた。

「大勢の人たち、こっちに向かって来る。すぐ下の広場、集まってる！」

そのまま、両掌を耳に当てる。

「——羽音する！ 奴らが飛んでくる！」

言い終わらないうちに、窓ガラスに六角虫が張り付き始めた。

奥寺が走りながら大声を上げる。

「電磁シールドシステムに印加！ 全員部屋の中央へ！」

エピローグ

「あの建物全体に電磁シールドの設備が設置されていたようです。」

舟入本町カップルのマンション、窓の外は梅雨の重たい闇が帳を下ろしていた。

「金属の網のようなものが建物を覆っていて、それで外部からの不要な電磁波を遮断するようです。」

「実験施設だから必要なんだろうけど、それでどうして六角虫や暴徒群衆を撃退できたの？」

ナイトキャップのシールドを準備しながら、玲子が訊ねる。

「金属の網に電圧をかけると、建物外部に強い磁場が出来るんだそうです。」

「——そう言えば穴見先生、MRIで患者の耳鳴りが解消したって言ってたわね！」

「六角虫の自律制御が磁力で破綻したんだと思うが、メカニズムは未だ解らなくて、早急に解明するって奥寺君言ってました。」

「ラボの窓を銀色に六角虫が覆い始めたときは、生きた心地がしなかったわね。直ぐにガラスが破られるって、覚悟したわ……。集まってきた群衆はどうなったの？」

「その瞬間、みんな頭を押さえて地面に蹲って、上の窓から剥がれ落ちた六角虫がパラパラ散り落ちて……。最後はフラフラしながら立ち去ったそうです。」

淡いブルーのシャンパングラスの中で、冷え切ったシールドから細い泡の筋が立ち上がる。

「五課は、クリニックの経営者を合成麻薬の件で事情聴取するつもりだけど、中国の医療法人だから、警察庁経由して外務省に働きかけても難航してるみたい。」

「でも、新種の六角虫を準備して、点滴や輸血で患者の体に注入させた真犯人がいる筈でしょ？ それはやっぱり……。」

「医療法人の経営者が犯人だとは限らないわ。もし経営者の事情聴取が出来るなら、MRIで内耳の映像を撮ってみるべきだと思う……。」

窓の外のネオンがぼんやりと霞んできた、川風の冷気が夜霧を運んできたようだ。

「確かに、六角虫そのものは過去に誰かが大量に製造してたんだと思う。でも今回の六角虫は……注入された全員で運用したんじゃないかしら。」

「——どういう事ですか！」

驚いて振り返った笑子が、シールドを溢しそうになる。

「奥寺君が言ってたじゃない、システムCの新しい機能。電波を音波に変え、音波を電波に変えるって……。つまり、暴徒群衆の呟いた言葉が電波に変換され、システムAを指揮したんじゃないかしら。ネットと同じで群衆には中枢や階層はないわ、同じ呟きの最大値で六角虫は行動する……。そうになると、これは貨幣経済の終焉ね。」

「——それもまた、どういう事ですか？」

「貨幣の唯一の価値は、自分の為に他人を働かせる機能。人の体内に注入された六角虫が、音や脳内有機物を使って人の行動を制御出来るとすれば、貨幣と全く同じ機能があるって事。それも、人間相互にね・・・。」

「私、筋力つけるために毎日牛乳1ℓ、お金出して買ってるんですけど・・・。」

「——牛に直接お金払ってる訳じゃないでしょ。ガソリン買う為に油田に直接払わないし、車買う為に工場に直接払わない、お米買う為に田んぼに直接払わないわ。みんな、それに関わる人間の労働にお金払ってるの。」

「でも、やっぱり貨幣経済の終焉だなんて、釈然としません！」

「何れにせよ、明日五課と合同で特別捜査本部を立ち上げることになる・・・忙しくなるわよ！」

そのまま背後のベッドに笑子を押し倒す、暫く絡んだカップルはやがて全裸に・・・。

——おわり——

本作品はフィクションであり、実在の個人・団体等とは一切関係がありません、悪しからずご了承ください。

尚、表紙に使用しました写真は“Photo AC”様より転載させて頂きました。

The end of monetary economy

著 者 南海部 覚悟

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
